



## 研修の現場から

研修で学んだ技術が  
途上国で活かされています

(財)札幌産業振興財団では、JICAとの連携のもと1989年より15年にわたって発展途国の中堅ITエンジニアを対象にエレクトロニクスの技術、IT振興等に関する研修を実施しています。

これまでに140名の方がこの研修に参加しました。「研修員が日本で学んだことをどのように活かすのか、また過去の参加者はどのように活かしているのか?」、もちろん帰国後に活かされるよう研修を行っています、でも常に心のどこかにこの疑問が残っています。そこで、研修員の指導にあたってきた北田氏、水野氏、大湯氏の3方は、今年の5月に、メキシコの帰国研修員を訪れました。メキシコで見たのは、研修で学んだ技術が実際の製品に活用されている様子、研修成果が大学教育の場で現地の技術者養成に活かされている様子でした。

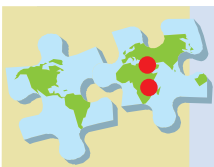
「研修員が努力した成果が実を結びました。今年もまた、研修をがんばりたいです」とは現地を訪問した北田氏の言葉です。数年後には、(財)札幌産業振興財団の手厚い指導と研修員の努力が世界の様々な国で実を結ぶのではないのでしょうか。

\*現在、本研修コース「南西アジアIT人材育成」を実施中です。

(JICA札幌 宮下)



左:トルカ工業大学では、研修で参加したマイコンカラー大会をヒントに、マイコンカーのレースを開催しています  
上:水野講師と帰国研修員。Mabe社の冷蔵庫には研修で学んだマイクロチップの技術が採用されています  
下:帰国研修員とJICAメキシコ事務所



## 途上国の現場から

北海道の教育現場の経験を  
途上国へ

**「北海道の教員としての経験を多くの発展途上で発揮してもらいたい。  
そして、多様な経験を積んでもらいたい」**

北海道では今年度からより多くの現職の教員の方が青年海外協力隊に参加できるようになりました。来年度、北海道からは約20名の教員の方が派遣される予定です。現職教員が青年海外協力隊に参加することの意義、そして活動状況などをより深く理解するために、この10月、北海道教育庁の方2名が、ウガンダ、ヨルダンを訪問し、実際に青年海外協力隊員の派遣までの活動状況を視察するとともに、隊員たちと意見交換をしてきました。

ウガンダでは、小学校教員養成校で活動する北海道出身の椎谷隊員、樋口隊員ほか7名、ヨルダンではこの3月まで静内町にある平取養護学校静内ペテカリの園分校に勤務し、現在アンマンの養護施設で活動している小野隊員ほか2名を訪問しました。

今年7月から活動している小野隊員は「まだ、この施設で働き始めて3カ月余りですが、これからの活動の在り方を、現在、ヨルダン人の先生たちと検討している段階ですが、日本の学校での経験を活かし、スポーツや音楽を通じて、ヨルダンの知的障害を持つ子供たちのため、力を発揮していきたい」と生き生きと抱負を語っていました。

教育庁の方々も、現地に溶け込み、現地の方々と一緒に活動する隊員の姿に接し、「北海道の教員としての経験を途上国で存分に発揮してもらいたい」、「北海道と全く異なる環境の中で、現地の方々との相互理解を深めながら活動する協力隊での経験は、教員の方々にもいい貴重な体験となり、北海道教育にも大いに役立つことを期待している」と、今回の訪問の感想を語っていました。

(JICA札幌 荒)



上:ボーリングゲームを養護学校の生徒と楽しむ小野隊員。まだヨルダンの養護学校では、体育、音楽といった情操教育が体系的に行われていません。養護教育の改善を目的に、ヨルダンをはじめ多くの開発途上で青年海外協力隊が活動しています  
下:ウガンダの小学生と椎谷隊員と北海道教育庁職員  
椎谷隊員は理数教師として小学校教員養成校で先生をしています。この日は、生徒の教育実習の様子を見に、現地の小学校を訪れました